



毛越寺の庭園

## 奥州藤原氏の栄華 浄土を表現した作品群 「平泉」



源義経最期の地・高館からの眺め

昨年6月、中尊寺金色堂をはじめとする「平泉の文化遺産」が世界遺産に登録されました。国内で12番目、東北では初の「文化遺産」です。

「平泉」は、中尊寺、毛越寺、観自在王院跡、無量光院跡、金鶏山の5つの資産が、仏教の理想世界である仏国土（浄土）をあらわす建築・庭園および考古学的遺跡群として高く評価されました。

とりわけ、毛越寺庭園をはじめとする4つの寺院が、信仰の山である金鶏山などと深く関連してまとまりのある小空間に残されていることは、平泉の大きな特徴として、その価値が認められています。これらの浄土庭園のうち、すでに修復整備が完了しているのが毛越寺庭園と観自在王院庭園で、平安時代の素晴らしい庭づくりの手法を目の当たりにすることができます。

残る2つの庭園は現在発掘調査が進められており、数年後にはまず無量光院跡の庭園が再生される予定です。無量光院は、源義経を養育したことで有名な奥州藤原氏三代・秀衡が、京都宇治の平等院にならって造営した寺院です。伽藍全体で阿弥陀如来の極楽浄土が表現された荘厳な寺院で、その規模は手本にした平等院を遙かに凌ぐものだったことが、これまでの調査から明らかにされています。

中尊寺境内に残る大池伽藍跡には、平泉で最も古い時代に造営された浄土庭園の遺跡が良好な状態で残されています。発掘調査では、池の周囲をつき固めた土木工事の痕跡とともに、当時のハスの実が発見されました。毎年夏になると、発芽に成功して850年の夢からさめた古代ハス（大池ハス）が池跡を鮮やかに彩っています。この大池伽藍跡も将来の修復整備が予定されています。

平泉唯一の国宝建造物である中尊寺金色堂は、平安時代の姿が完全な姿で残された仏堂として貴重であるばかりでなく、その堂内須弥壇内に奥州藤原氏四代の御遺体を安置するいわば霊廟として、今なお人々の信仰を集めています。

内外に金箔を押しした皆金色の堂内には、阿弥陀如来を中心に諸仏が安置され、その内外の荘厳全体で阿弥陀浄土の宮殿を表現しています。金色堂は平安時代末期の美術工芸における最高の技術でつくられた正に傑作であり、国際的にも高く評価されました。

平泉は悲劇の英雄・源義経最期の地、さらには松尾芭蕉「おくのほそ道」ゆかりの文学の地として、日本史や古典に名を残してきました。世界遺産としての価値とはやや異なるのですが、私たち日本人の「心のふるさと」として、これからも大切にしていきたいものです。

(協力/平泉町世界遺産推進室)

